
君は東京

輝樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は東京

【Nコード】

N00510

【作者名】

輝樹

【あらすじ】

ここはド田舎。

オレの友達の梅子は
東京に憧れていたんだ。

ゆずの『君は東京』
という歌を

小説にしてみました。

(前書き)

あらずじにも

書きました通り、

ゆずの『君は東京』

という歌を

小説にしてみました!!

違う部分もあり、

ほぼ似た部分もあります。

いつも通り、

グダグダなのですが、

まだマシかなあゝ

と思います。

ゆずのファンの方は

本当にすいません!!

ですが、よろしくお願いします!!

「ふう〜…。」

「どうだ、トメコ!」

オレ、志智木^{しちぎ} 雄介^{ゆうすけ}が牛のトメコに話しかけると『モオ〜』と元気そうに返事する。

オレの家はこじんまりとした牧場で、牛の世話をするのがオレの日課である。

そして、ここはド田舎で、電灯なんてほとんどない。アイツが行った『東京』ってトコロとは大違い。

オレは空を見上げ、あること思い出した。

「なア、志智木!」

アタシ高校卒業したら東京で夢のある生活するだ!」

「…ハア?」

中学校の頃のオレは冷たくこう返した。

「そんな東京なんて…。」
東京はすごく怖いんだぞ??

お前が行ったら3日で帰ってくるわ。」

「…そうなんだか??」

オメエは昔住んでたんだろ??」

実は実は。

昔 東京に住んでいたオレ。

いろいろあつて、じいちゃんの家に住んでいたりする。

じいちゃんの家がまさかこんなド田舎だなんてオレも思っていなかった。

初めは慣れなかったが、今は大分と慣れたもんだ。

「まあな…」。

でも、今はここがいいって思ってるんだ。

東京なんて人がたくさんいて何が起こるか分からない。」

「…でもオラ東京行くだ!!」

「…梅子。お前マジで言ってるの??」

「んだ〜。」

梅子、それがこの女の名前だ。

梅子はとても能天気で正直、東京の波に流されてしまうとオレは思う。

「…まあ、がんばれよ。」

「んだっ、ガンバルだよ。」

バリバリの方言でそう言った梅子。

まず、梅子って名前も東京に行ったら『何それ、ギャグ？』とか言われてしまいそうだ。

どうなるんだろ、コイツ。

そして何年かして、今日は高校の卒業式だ。

梅子とオレは同じ高校に進学していた。

「ここで過ごしたことはいつになっても忘れませ——ん!!」

梅子はマイクの前でこう叫んだ。
今でもそれを覚えている。

桜もほぼ散ってしまった。

「…志智木、オラやっぱり東京行くことにしただ。
親にスライディング土下座したらどうになっただ。」

「…ただの土下座じゃダメだったのか??」

「んだっ、ただの土下座じゃ無理だったっぺよ。」

スライディングすることによって」

「…分かった、分かったから。」

ぐだぐだと説明されるのも少し鬱陶しかったのでサラッと流す。

梅子は少し拗ねてはいたが、すぐに二カツと笑って

「手紙、たくさん書くだよ!!」

…って言ってたな。

「…うん、待ってる。」

昔のオレはそんなことしか言えなかった。

照れくさかったのか寂しかったのか。

どうにも素直にはなれないもんだ。

これがオレの高校の卒業式だった。

それからオレは大学に入り、のんびりと過ごしていた。

梅子から初めは手紙がたくさん来ていたが、段々便箋の数が減り、最終的にはパツタリ来なくなった。

大学に行く前にいつも、郵便受けを開けては閉める、そんな毎日だったかな。

ある日、梅子から『東京に遊びにおいでよ』みたいな手紙が届いた。

久しぶりに梅子に会える。
そんな気持ちがあった。

もちろん、不安もあったし、期待もあった。

そして、おじいちゃんに相談したら大学生だからということでも許してくれた。

この時だけ、『大人でよかった。』そんな単純な事を考えてたっけな。

ワクワクしながら準備をし、何度も『忘れ物がないか』と確認したりもした。

夜中に東京へ向かう時になんて、寝れなかったくらいだ。

それだけ梅子の事が気になっていたのかも知れない。

東京に着いて、駅前に立っていた梅子を、初めて見たとき、『梅子じゃない。』そう思った。

「あ、やっと来た。
久しぶり、志智木。」

喋り方は勿論。
髪の色も、服装も、笑い方さえも変わってしまった梅子だった。

「…梅子??」

不思議そうに言ってたんだろうなア。

アハハって笑った梅子が冗談雑じりに

『うん、梅子梅子。』

と言ったんだ。

それは、もう梅子っていう名前ではないかららしい。

まあ、実際は梅子って名前なんだが、みんなには『美羽』って呼んでもらってるんだとか。

確かに、梅子なんてダサイ名前東京で通用することはないのカモしれない。

梅子自身も嫌なんだろうし。

「…家に遊びに来てよ、思い出話とかしたいしさ。」

梅子はずっと笑っていて、東京は楽しいんだよみたいなことを移動中、ずっと言っていた。

やっと梅子の家に着き、ドアを開けた途端、少しキツイバニラの匂いが僕らを包んだ。

「この匂い何??」
と聞いたら

「バニラのお香の匂いだよー。

今お茶出すから。」

そう言つて、小さなティーカップに紅茶を注いで机に置いた。

オレはドキドキして、心の中でとても焦っていた。

こういつ時つてどうしたらいいんだろう??

正直、一人暮らしの女の子の家は初めてだった。

「…志智木。

今…大学生??」

紅茶をすすりながら梅子が言う。

「そう…だな、梅子は??」

「あたしは…青山のカフェでウェイトレスやってる。」

思いのほか、会話は途切れ途切れで、昔のように話せなくなっていた。

やっぱり、そんなものなのかななんて思いながら、あるコトを思い出す。

『女の子ってのは、褒められるとうれしい』
…らしい。

だから、『髪型…おしゃれだな。』と照れくさそうに言っただ。

「えへへー、でしょ??」

カットモデルで済ましてるんだよ。」

うれしかったのか、ニコニコしていた。
ひとまず安心する。

そこから、梅子の彼は三つ年上の何とかっていうDJなんだとか
いう自慢に、東京での友達の話とか思い出話。

いろいろ会話した。

会話してる途中に、携帯の着信音が何度もなって忙しそうな梅子を見
て何だか悲しかった。

もうオレ『志智木』が入る隙間などないのだろうか、なんて思う。

「今日は楽しかったよ、この後どうするの?」

もう夜の11時になって、梅子と別れる時間になっていた。

「…安いホテルにでも泊まるわ。」

何だかもう会いたくないような気もする。

今の梅子は梅子じゃない。

まあ、梅子じゃなくて美羽って名乗ってるみたいだし。

「…悲しそうな顔しないでよ、アタシは楽しかったよ。」
梅子の顔がよく見えなかった。

「…オレも…だよ。」

後から気付いたのだが、これは涙だった。

何の涙だったのかは分からないのだが。

じゃあね、なんて言っただけでオレに背を向けどこかに消えてしまった梅子の背は、どこか寂しそうだった。

しばらく立つたままボーっとしていたんだ。
まだ鼻の奥はバニラのお香の匂いが残っている。

この匂いは、今でも思い出す。

でも、オレは気付いていたよ。

梅子も泣いてたんだ。

人前で泣くのが嫌いな君は東京の人だった。

そして、アレからオレは久しぶりに東京に来ていた。

梅子に遊びにおいでとかも言われていない。
ただど来たかった自分がいたんだ。

新宿のアルタ前を歩いていたらオレはびっくりした。

すごく…随分と痩せ細っていた梅子がいたからだ。

後から聞いた話では、訳の分からないクスリにはまって病院を行ったり来たりしてるらしい。

オレは遠目で梅子を見てからまた歩き出した。

少し、見なければよかったと思いつつ。

想えば梅子はオレの憧れだったんだ。

乾いた街を背に昼も夜も飛び回り洒落た仲間とはしゃいでいた、そんな話を聞いて、憧れてたんだよ。

無責任で自由を気取ってた君は東京の人だった。

…そして現在。

24歳になって、今も梅子の事を忘れられずにいた。

早く忘れたい、とか思っただが、これからも忘れられそうにない。

そう。

君は東京の人だった。

(後書き)

… 最後らへんなんて
歌詞をうつしただけ
みたいですよね ^^ ;

というかそうなのか。

どうでしたか???

もう一度言います!!

ゆずのファンの方は
本当にすいませんでした!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0051o/>

君は東京

2010年10月28日05時29分発行